

2024 年度 キッズステーション（子ども第三の居場所）事業

活動報告書

一. 事業目的

両親が共働きであったり核家族であったり、地域のコミュニティの希薄化により、子どもたちは孤独感を感じ、無力感を感じている。子供たちが抱える悩みに寄り添い、「食卓を囲む」「誰かと一緒に過ごす、作業をする」ことにより、友達同士の交流や、支援者である大人との日常的な交わり、体験活動を通して、自己肯定感、コミュニケーション能力、やり切る力、先を見通す力など、様々な「非認知能力」を育んでいくことが期待される。仲間や支援者と過ごし、基本的な生活習慣もあわせて身につく。そして、子どもから大人まで、多世代が支えあい、学びあう場を提供し、地域と社会そして世界をつなぎ、優しさを循環させ、誰もが安心して集える居場所を育む。そのような子どもの第三の居場所となるべく、本事業を実施する。

二. 主な事業内容

（１）子ども第三の居場所としての開設、運営

令和 5 年度の開設以降、令和 6 年度も引き続き、平日火曜日～金曜日及び第一土曜日の 11 時から 18 時に開所し、地域や年齢に関わらず、すべての子どもたちが利用できる施設として運営を行った。放課後、多くの子どもたちが当施設

を訪れ、宿題をしたり、本を読んだりゲームをしたり、園庭を走り回ったり、友達とおしゃべりをしたり、思い思い好きなことをして過ごしている。



（２） 地域食堂、多彩な体験プログラムの実施

今年度から、地域食堂を主に平日の放課後に実施するようにした。その結果、休日に実施していた昨年度より、より多くの子どもたちに地域食堂に参加してもらうことができた。日々の生活の中で食に困窮している子どもたちも、そうで

ない子どもたちも、皆が一つの食卓を囲み、お腹いっぱい食べられる幸福感に満たされていた。子どもたちからのリクエストにも答え、たこ焼きや焼きそば、ラーメンや揚げパンなど子どもたちの大好きなメニューも取り入れた。また、外国人ボランティアと一緒にもちつきをして一緒に食べる、昔ながらのおくどさんを使ってお米を炊く、野菜を切ってカレーライスを作るなどの調理体験プログラムも実施した。さらに、神戸大学生ボランティアの支援も受けて、竹を切って流しそうめんをしたり、隣接する畑でサツマイモを植えるなどの農業体験プログラムも実施した。

また、今年度の初の試みとして、「アグリスマイル」というプログラムを実施した。子どもたちが、当施設で、掃除や動物の世話などのお手伝いをするこ
によって、マイルを貯めることができ、それをお菓子やジュースに交換できるとい
うしくみである。お手伝いを通して、子どもたちは自主性を養い、誰かの役に立
つ喜びを感じてもらうことができ、アグリ通帳を通して、お金のしくみを学ぶこ
ともできた。







(3) 長期休み中の子どもの居場所プログラム

夏休みには、篠山産業高校生ボランティアの支援を受けて、工作教室を実施した。遠方からの利用者も多く、子どもたちが普段できない工作を楽しんだ。また、初めて「アグリキャンプ」というお泊り会を実施した。異年齢の子どもたちが、保護者と離れて、当施設で一緒に夕食や朝食を作り、ゲームや花火を楽しんだり、動物の世話をしたり、みんなで一緒に寝たり、初めての体験をたくさんした。新しい友達づくりにもなり、また来年も参加したいとの声が多数あった。

冬休みには、お楽しみ会を企画し、○×クイズやジェスチャーゲーム、ビンゴ大会などを実施した。外国人ボランティアも一緒に参加し、外国語のあいさつを教えてもらい、一緒にチキンを食べるなど、異文化多世代交流を行った。

春休みには、無料の駄菓子屋さんを行い、連日たくさん子どもたちが訪れた。駄菓子を目的に、今まで来たことがない子どもたちがたくさん来てくれた。



三. 年間延べ利用者数

年 月	大人	子ども※	(内小学生)	合計
令和 6 年 4 月	89 名	383 名	182 名	472 名
令和 6 年 5 月	141 名	518 名	345 名	659 名
令和 6 年 6 月	76 名	349 名	220 名	425 名
令和 6 年 7 月	135 名	467 名	261 名	602 名
令和 6 年 8 月	175 名	464 名	221 名	639 名
令和 6 年 9 月	83 名	355 名	226 名	438 名
令和 6 年 10 月	142 名	364 名	157 名	506 名
令和 6 年 11 月	261 名	527 名	245 名	788 名
令和 6 年 12 月	94 名	325 名	167 名	419 名
令和 7 年 1 月	81 名	271 名	124 名	352 名
令和 7 年 2 月	117 名	249 名	135 名	366 名
令和 7 年 3 月	160 名	530 名	279 名	690 名
年間延べ合計	1554 名	4802 名	2562 名	6356 名

※子ども（未就学児～高校生）

四. 今年度の改善点

1. 専門職スタッフの雇用による飛躍的な成長

アグリステーション丹波ささやまでは、保育士、幼稚園教諭、発達支援員、調理師、製菓技師など、多様な専門職のスタッフを新たに雇用。このことで、各分野における質の高いサービス提供が可能となり、事業全体のバランスが飛躍的に向上した。

- 保育や教育の分野では、子どもの成長を支える専門的なサポートが強化され、個別のニーズにも対応できる体制が整った。
- 調理や製菓技師がいることにより食育や地域食堂などのプログラムも充実し、子どもたちにとってより実践的で魅力的な体験の場が広がった。

2. ボランティアの拡充とグローバルな環境の促進

地域のボランティア活動に加え、神戸大学や篠山産業高校の学生、さらには海外からのボランティアの参加が増えたことで、当施設内の環境が一層多様化し、グローバルな視点が広がった。

- 学生ボランティアの参加により、若い世代の新しいアイデアやエネルギーが注入され、プロジェクトの幅が広がり、子どもたちにとっても刺激的な学びの場となっている。
- 海外ボランティアの関わりが増えたことで、異文化交流が日常的に行われるようになり、子どもたちはグローバルな視点を自然に学ぶことができるようになった。

った。多文化共生の重要性が実感できる環境が整っており、地域全体にとっても貴重な交流の機会が生まれている。

3. 双子のヤギの導入で優しい環境作り

南阿蘇から双子のヤギを迎え入れたことにより、当施設的环境はさらに豊かになり、人にも動物にも優しい場所へと変化した。

- 子どもたちは動物と触れ合うことで、命の大切さや動物への思いやりを自然に学ぶことができるようになり、感情教育や生物教育の面でも効果が期待されている。
- また、ヤギたちとの触れ合いを通じて、リラックス効果や癒しが得られ、当施設全体がより温かく、心地よい場所として地域に愛されるようになった。

五. 今後の重点アプローチ課題

子どもたちが様々な体験プログラムや地域食堂での役割を担うことを通じて、自信をつけ、地域の一員として成長するために、以下の点が重要だと考えた。

1. **責任感の醸成:** 子どもたちは、調理や食堂での役割を通じて、他の人に貢献する経験をする。これにより、責任感を持つことや、自分の行動が周囲に影響を与えることを学ぶ。小さな成功体験が自信につながり、「自分も役に立てる」という感覚が育まれる。

2. **コミュニケーション能力の向上:** 当施設に来ることで、子どもたちは様々な年齢

層の人々と会話したり協力したりする機会を得る。これは、コミュニケーション能力や協調性の向上につながり、地域の一員としてのつながりを深める。

3. **感謝の心と共感力の育成:** 調理や食事の提供を通じて、他の人の喜びや感謝の表

現に触れることで、子どもたちは感謝の心や共感力を育てることができる。これにより、地域社会への貢献意識が強まり、助け合いや支え合いの大切さを学ぶ。

4. **地域とのつながり強化:** 地域食堂や調理体験を通じて、地域の大人たちや他の子

どもたちと協力することで、子どもたちは「自分は地域の一員である」という意識を深める。これにより、地域社会への帰属意識が高まり、将来的に地域に貢献する意欲も生まれる。

5. **達成感と自己効力感の向上:** 自分の手で何かを作りあげたり、人々に喜んでもら

える体験をすることで、子どもたちは達成感を得る。この達成感は、自己効力感（自分にはできるという感覚）を高め、様々な場面で積極的に挑戦する姿勢につながる。

このように、子どもたちが地域食堂での役割を担い、実践的な体験を通じて自信をつけることは、地域の一員としての成長を促す貴重なプロセスである。それは、個々のスキルだけでなく、社会性や連帯感を養うことにもつながり、将来の地域づくりにとって大きな財産となる。

子どもたちが主体となり、彼らのニーズや興味を第一に考える「子どもファースト」のアプローチでプログラムを構成するためには、柔軟性が非常に重要である。以下は、プログラムの柔軟性を持たせるためにスタッフが今後重点的にアプローチする課題である。

1. 子どもの興味と好奇心を中心にプログラムを設計

- 子どもたち自身の「やってみたいこと」や「興味のあるテーマ」を最初に聞き取り、それを基にプログラムの内容を決める。例えば、料理が得意な子、手作り工作が好きな子、体を動かすことが好きな子、それぞれの好みに合わせて活動をカスタマイズする。
- 大人の目標や予定にとらわれず、子どもたちが自由にアイデアを出し合い、それをプログラムに反映させることが大切。これにより、子どもたちは活動への関与感が増し、主体的に取り組むようになる。

2. 変更や調整ができる柔軟なスケジュール

- プログラムの進行は子どものペースに合わせ、時間や活動の進行は厳格に固定せず、必要に応じて変更が可能な柔軟なスケジュールを設定し、活動中に子どもたちが特定の内容に強い興味を持った場合、その場で予定を変更して深掘りすることも許容されるべきである。
- また、活動の途中で新たな興味が生まれた場合、柔軟に対応できる体制を整えて

おくことが重要。

3. 失敗や挑戦を尊重し、固定した結果を求めない

- 子どもたちが試行錯誤しながら進めることを重視し、最初から完璧な結果を求めないようにする。失敗やうまくいかないことも、学びの一部と捉え、次のステップに活かす姿勢を大人が示すことで、子どもたちはプレッシャーを感じずに自分のペースで成長することができる。
- そのために、評価基準やゴールを固定せず、柔軟に対応できる枠組みを作る。

4. 多様な選択肢を提供する

- 一つの活動に固執せず、複数の選択肢を子どもたちに提供することで、彼らが自分で選び取る自由を尊重する。例えば、調理に興味がある子もいれば、他のクリエイティブな活動に興味を持つ子もいるかもしれない。そのため、常に複数のアクティビティを提案し、それぞれが好きなものに取り組むことができる環境を作る。

5. フィードバックを重視した進行

- プログラムは一度決めたらそのまま進めるのではなく、子どもたちからのフィードバックを定期的に取り入れる。何が楽しかったか、何をもっとやりたいかを聞き、それに基づいて内容を調整する。これにより、子どもたちの参加意識が高まり、自分たちで作り上げていく感覚を持つことができる。

6. 大人の役割はサポーターとしての姿勢を保つ

- 大人はあくまでサポーターとして、子どもたちのアイデアや決定を尊重する。子どもたちが決めたことややりたいことをサポートする姿勢を持つことが重要。
大人がリードするのではなく、必要な時に手助けし、子どもたちが自らの力で解決できるよう見守る立場に徹する。

7. 共感的で柔軟なルール設定

- 活動を進めるにあたって、最低限のルールは必要だが、それも子どもたちの意見を取り入れ、共感的で柔軟に設定する。ルールは子どもたちが守りやすく、かつ自分たちで考えたものだと感じられるようにする。こうすることで、ルールを守ること自体が自己管理の一環として捉えられ、自己調整能力が育まれる。

結論:

活動を通じて、子どもたちが地域の一員として自信を育むには、責任感や自己効力感の醸成、コミュニケーション力の向上が重要であるとわかった。一方で、子どもたちの興味や主体性を活かすには、プログラムの柔軟性が不可欠である。今後は、「子どもファースト」の視点で、子どもの興味を中心にした活動設計や、選択肢の提供、失敗を許容する環境づくりを進める。加えて、子どもたちの声を反映したルールや内容調整を行い、大人はサポーターに徹し、これらを多彩なボランティアや多世代の関係者を巻き込むことにより、子どもたちの自発的な学びと成長を支えていく。